

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」発足23周年の集い
チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないで！

大地震・津波 そして原発重大事故
“福島の想い・命の尊さを伝えたい”

～プログラム～

- * 基調報告・救援関西の取り組み
- * 福島訪問報告
- * 紙芝居：「命の次に大切なもの」
- * 福島からのゲストのお話

今田かおるさん（猪苗代町・医師）

福島の緩和ケア医が語る東京電力福島原発事故の現状

☆ベラルーシの民芸品・手作りケーキなどの救援バザーもあります☆



（「命の次に大切なもの」より）

日時：12月14日（日）午後1：30～4：30

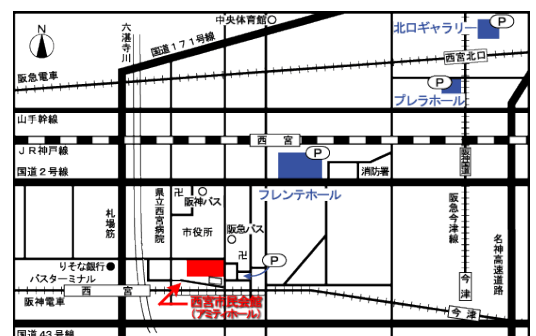
場所：西宮市民会館（中会議室301）（阪神・西宮北側すぐ）

参加費：800円（学生 500円）

お問合せ：0722-53-4644 いのまた、0797-74-6091 たなか

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からもうじき4年目を迎えます。第一原発では、収束にはほど遠い状況が続いています。事故によって大量に放出された放射能による汚染は福島県にとどまらず周辺県にも広がりました。被災地では放射能と向き合いながらの生活が続き、今後の健康への影響も心配されています。

川内原発では県知事が再稼働に同意しましたが、反対運動が粘り強く継続されています。関西では関電が高浜原発3・4号機、大飯3・4号炉の再稼働を狙っています。各地で地震・火山活動が活発になっています。フクシマの現状を見れば、原発再稼働など言語道断です。フクシマの経験を「風化」させてはなりません。私たちはこれまでも福島から様々な状況の中で被災された方々をお招きし、お話を聞き、交流してきました。今回はお二



人のゲストお招きする予定でしたが、ゲストのお一人、村上美保子さんに来ていただくことができなくなりました。突然の衆議院選挙でしかも14日は生憎と投票日と重なり、地元で選挙管理委員会の職務代理者（副委員長）をされている村上さんは、選挙当日は絶対に留守ができないそうです。本当に残念ですが今回は諦めざるを得ません。紙芝居と「素晴らしい語り」をまた改めてお願いできる日を心待ちにしたいと思います。代わりに「救援関西」のマルチタレントが紙芝居の代役を務めます。又集会では、11月中旬に「救援関西」のメンバーで福島を訪れた報告も行います。「救援関西」の一年間の活動を振り返えるとともに、「福島の想い」をお聞きし、チェルノブイリとフクシマを繋ぎ、これ以上繰り返さないために、私たちに何ができるか、皆さんと語り合いたいと思います。当日は選挙の会場に足を運ぶと同時に集会にも是非ご参加下さい。（詳しくはチラシを参照ください。）

第2回 福島「交流の旅」報告

事故から3年半以上経った今のフクシマの現状を知りたい、この目で見たい、触れたい、また福島の皆さんと交流を深めたいという思いから11月15日から17日迄、昨年に引き続き2回目の福島訪問・交流の旅が行われました。参加者は、しょっちゅうフクシマに行っている「案内人」振津、昨年も訪問した猪又、長澤、初参加の田中さんの「救援関西」のメンバー4名です。今回も極めて「濃密」な交流の旅になりました。フクシマは、昨年訪問した時とはまた違った困難と決意、一方で事故以来変わらずに時間が止まったままのフクシマも見ました。皆さんと嬉しい再会をしながらお話を伺いました。

「復興」が声だけに叫ばれる中で、問題は山積しており事故の傷跡は深く残っています。フクシマを風化させてはならないし、繰り返してはならないとの思いを強くしました。そして改めて私たちが被災者と連帯してできる事は何かを考えさせられました。

福島の皆さんには、お忙しい中時間を割いてくださり、皆さんに本当にお世話になりました。どうもありがとうございました。これからも交流を深めていければと願っています。

訪問1日目（11月15日）

飯館村から避難して3年半あまり・・・

福島訪問初日。早朝に家を出たが東海道新幹線のトラブルで、福島駅に着いたのは1時間遅れの12時半過ぎ。郡山あたりから雲が多くなり、福島は雨で肌寒かった。駅前からレンタカーに乗りこみ、「あぶくま茶屋」に向かう。

【あぶくま茶屋】

福島市郊外にあるあぶくま茶屋では、飯館から福島市内に避難されている渡邊とみ子さん（「かーちゃんのか・プロジェクト協議会」会長）が待ち受けてくれた。昨年2月に渡邊さんに来阪していただいて講演をしていただき、また6月に福島訪問した時にお会いして、それ以来だから1年余りでの再会である。早速昼食を頂いた。オリジナル品種改良のジャガイモ「イータテベイク」やカボチャ「いいたて雪っ娘」などを材料に、手作りの阿武隈の郷土料理がいっぱいつまったお弁当だ。「ごごみ大根」の煮物なども加わり、野菜中心の素朴な美味しさだ。食品は全て放射能を測り、放射性セシウムの自主基準20ベクレル/kgを設けているが、今は殆ど検出されることはないとのこと。それでも中には自主基準を超えるものもあり、その野菜をボツに



しなければならない時は本当に辛いと話される。本当に沢山の課題をかかえて奮闘される苦勞を思う時「一番したいことは？」と思わず聞いてしまった。渡邊さんはキョトンとして「カボチャをちゃんと作ること」と即答された。

「プロジェクト」は「かーちゃん笑顔が元気の源」と農産加工品の加工・販売、笑顔弁当作り、そして郷土の伝統料理を伝承したいとイベントを行うなど頑張っている。日頃の活動を紹介してくださるのに準備してくださったパワーポイントを使いながら「私がパワーポイントを使うなんてね。おっかしいでしょう。」と照れ笑いしながら話される。原発震災で全てを失い絶望の中から「諦めないことにした」と誓った後も本当にいろんな思いが積み重なってきただろうけどその素朴な笑顔は素敵だった。相変わらず多忙な日々を過ごしておられ、この日も静岡テレビが一日密着取材にきていた。

【飯館村・フレコンバッグの山また山】

午後 2 時過ぎにあぶくま茶屋を出て、川俣町を通り、飯館村に向かう。川俣町にも仮設住宅が並んでいた。4 回目の冬を迎えようとしているのに、まだ仮設住宅に住まざるを得ない現実。これは一体何なんだと怒りがこみ上げる。途中、実がたわわに実った柿の木を何本も見、盛りの紅葉を見ながら高原に登っていく。飯館村入り口では車内で 0.267 マイクロシーベルト/時。対向車が一杯でバンバンすれ違う。除染作業を終えた作業者の帰りの車なのだろうか。朝など車のラッシュ時はすごい混みあうとか。さらに驚かされたのはフレコンバッグの山。以前は農地であった場所や道端にも表土を剥ぎ取ったり除染した廃棄物を入れた黒いフレコンバッグがバンバン積み上げられて所狭しと並ぶ。去年訪れた時の比ではない。一体どれくらいあるのか見当もつかない。まさに除染ラッシュなのだ。一方で表土を剥ぎ取られ、グラウンドのようになってしまった農地がある。これが除染なのかと言葉を失う。村役場前のモニタリングポストは放射線量は 0.41 マイクロシーベルト/時を示していた。隣の花壇の土の上では線量計は 0.865 マイクロシーベルト/時を指す(地表で測定)。モニタリングポストを見ていると、駐車してあった車から男性が出てきて話しかけてきた。その人は今



福島市に避難しているという。除染作業には毎日 7 千人が入っているそう(ちなみにこの人数は村の人口 6 千人を上回る)。作業者は、北は北海道から南は九州までいる。飯館村村民はそのうちの 1/3 位と話してくれた。夕暮れの迫った中で隣の建物から出てきた除染作業者たちが帰り道についていた。その中にはとても若い男性もいた。

【えびす庵にて・私たちは棄民か！】

日もとっぷり暮れて福島市郊外にある「えびす庵」に着く。えびす庵の高橋さん夫妻は飯館村からの避難者である。相変わらずお元気で、お母さんの肝っ玉ぶりも変わらなかった。ひとまず休憩した後、夕食とする。途中から菅野哲さんが加わってくださった。前日に東京で飯館村村民の約半数にあたる 3 千人が慰謝料など賠償の増額を求めて国の原子力損害賠償紛争解決センターに裁判外紛争解決手続き(ADR)を申し立てた。菅野さんもその一人である。菅野さんは「生活基盤をすべて奪われた。全く白紙になった。今まで築いてきたもの、文化、コミュニティすべて奪われた。単に故郷を失ったのとは違う。避難民から難民になった。もう 4 年にもなる。これは難民から棄民にするということだ。「棄民って分かりますか？」と 3 年半以上にわたって胸の奥にため込んでいた、やむにやまれぬ思い・怒りを口にされた。日本酒は美味しかったのに、話の内容は本当に辛かった。



えびす庵は飯館村の人びとのくつろぎの場所、村の仲間に会える場所にもなっている。菅野さんが帰られた後は、他の村の人びとや高橋さん夫妻も加わり、いろんな話をお聞きした。ある人は「必ず村に

帰る。何のために毎日村に行って花や家の手入れをしているのか。」またある人は「子どものためには、きっと帰らない。しかし故郷としては無くなってほしくない。」と話された。民生員の方からは、高齢者を孤立させないために一人一人にお便りを出している。返事があると嬉しい。というお話も聞かせてもらった。高橋さんは「宿泊者からお礼にと松の実で作った置物が届いた。」と嬉しそうに見せてくれた。等等、それぞれの思いをお聞きしながら、いつの間にか夜中になっていた。

(いのまた)

福島訪問2日目(11月16日)

初めての福島訪問で多くの出会い

朝目覚めてカーテンを開けると、遠くに雪をかぶった山なみが見えた。東北の冬が始まっている。

用意の朝ごはんに加え、昨夜食べきれなくて残した魚の煮付けも暖めていただき、ペロリと平らげる。これじゃグルメ旅行になってしまうがなと思いながら。

【飯館の若いお母さんたちとの出会い】

9時に飯館村から福島市に避難移住した若いお母さん4人と、福島市の汚染を心配して彼女たちに合流した方が、子どもさんといっしょに来てくださった。お姉ちゃんたちが小さな子の面倒を見てくれるので、その間にお母さん方の話を聞く。避難当時は“いいたて子どもを守る会”として活動していたが、今年の春に会の活動は休止した。3年以上経って、福島市に家を買って定住を決めた人、まだ借り上げ住宅に住んでいる人、地域の除染が済みかなり数値が下がったので少し気持ちが楽になった人など、それぞれの立ち位置がだいぶ変わってきた。

みなさんそれぞれの考えていることや不安に思っていることなどを伺った。

やはり放射能のことは気になるし、子どもの甲状腺検査の結果「嚢胞がある」というので心配だが、去年よりは大きくなっていないので、しばらく様子を見るしかないのかと、今さらながら原発事故さえないければ・・・との思いが強い。ネット情報に振り回されずに冷静でいるのが大切とわかっているが、不安を押さえ込むのは難しい。水は買っているし、野菜も福島産は避けているというお母さんもいる。事故直後より生活は落ち着いてきているが、気になることを話し合えない雰囲気が出てきている。

除染はやればある程度の効果はある。しかし除染作業もいい加減にしかない業者もあるので、「子どもの通学路などは念入り」になど、差し入れを持っていったりして、気を遣いながら、いろいろお願いしたとのこと。

子ども達の学校の選択にしても、村の学校が合併した学校にバス通学させるか、今住んでいる地域の学校に行かせるかで迷いがある。中学進学時に住む地域の学校に転校する例が多いそうだ。村にはもう帰らないし、バス通学は時間がかかり、部活などがしにくいからという理由だ。

その他に、やっと洗濯物を外干しすることにしたとか、これまで外遊びを制限してきたので、子どもの肥満が心配とか、話が具体的なので、置かれている状況がよくわかる。それぞれ少しずつ違った条件で、子どもにとって「よりよい選択」をしようと、精一杯頑張っておられる。「私たちは特別なお母さんじゃない。でもできることをやってゆく」という言葉が印象に残った。

村に帰って家の整理をしたら、家財や衣類などがねずみに荒らされて、300袋！もゴミを出し、箆箆や布団やベッドも全て処分したとのこと。懐かしい家の片付けは、きっと悲しかっただろうに、それでもしっかり働いているんだなあと感じた。話がしんみりしないのは、彼女たちが現実を真正面で受け止めているからだろう。

小さい子どもさんが4人いるあるお母さんは、もう飯館には帰らないつもりでいる。それではお年よ



贈られたおもちゃで遊ぶ

りは？「病院が近いのがなによりと、もう帰らない気持ちのお年寄りも多いはず」とのこと。ただ 福島市に家を買って定住を決めた方は、「子どもは飯舘っ子じゃなくなって、福島っ子になってしまう」と少々さびしげな様子だった。

大阪のおもちゃ屋さんが福島の子ども達へと寄付してくださったおもちゃを、みんなで使ってくださいとお渡しして、次の約束へと出発。お母さん子ども達が民宿の方々といっしょに見送ってくださった。

【福島市内で集える場所】

“福島移住女性支援ネットワーク（EIWAN）”というグループの事務所でお話を聞いた。世話人は神戸出身の方で福島と神戸と北海道を行ったり来たりの生活をしておられる。元はYWCAで活動をされていた。「外部の者の方が関わりやすいということもある」と、おっしゃる。3・11以降情報弱者になりがちな外国人移住者（特に女性）を支援するために、日本語サロンを開設したり、情報提供や相談を行ったりしている。フィリピン人や中国人が多いとのことだが、今日は来られていない。経済的に大変なので、フィリピン女性が瓦礫処理や除染の仕事に就いているなど、困難な生活を送っていると心配されていた。

今回集まってくくださったのは日本人の方々ばかりで、1年の母子避難ののち戻った方、避難すべきか迷いながらも、夫の転勤を待って家族全員で移住したいと思っている方など。福島市では放射能被害を心配しているのは表面的には少数派で、多くの人がそのことには触れないようにしているそう。子どもの屋外活動参加や給食に関して悩んでいるお母さんを「神経質だ」と決めつけたり、小児科医も「お母さんこれは事故の影響ではありませんよ」と前置きしてから診断したりで、そんなだと心配していることを打ち明けられないと、心労の多い毎日を語ってくださった。

一応福島市は大丈夫ということにされているので、そんな雰囲気の中で、自分で考え決断するのはかなりの緊張が強いられるだろう。大人のリアクションを子どもが受け止めることになるから、子どものストレスを考慮しないといけないし。保養に行ったことも子どもには口止めしているとの話に、子どもを守るためにやっていることが、他者の目にどう映るかを気にしながらの生活は二重に苦しいだろうと想像される。

世話人の話によると福島市ではスピリチュアル系の流行が甚だしいとのこと。夫婦でも考え方が違ったり、心の奥では不安を抱えているゆえ手近な癒しを求めるせいか、ちょっと危ぶみを感じがすと述べておられた。日々頑張ってきたお母さんたちが疲れてきた今、低線量被ばくのリスクや、原発事故の背景、国の責任もちゃんと理解したカウンセリングの専門家が必要と実感しているとのことだった。

昼食をいただきながらの話は多岐にわたったが、時間はどんどん過ぎ、3番目の目的地に出発。



【東電と国は被害者の声を聞け！ 原発事故被害者集会 ～もう我慢はしない立ち上がる～】

集会に約 30 分間参加。飯舘村民救済申立団（長谷川健一さん）と、福島原発告訴団（武藤類子さん）のメッセージ「人生をかけて守ってきたものを奪われ、我慢を強いられ、人間の尊厳を踏みにじられた・・・」を聞き、会場を後にする。なんと忙しい私たち！

【長野県松本地区の視察団と地元交流の場に参加】

約3時間のドライブで、本日の宿泊「かんぼの宿いわき」へ。もちろんここでも次なる出会いが・・・長野県松本地市から地区の原水禁、議員さんや市民グループの方々が視察に来られ、避難者の仮設住宅訪問や、いわき市の方々と学習会を開催。学習会はだいぶ進んでおり、私たちが到着した時は、原発の収束作業に当たっている労働者の就業実態の説明の最中で、数段階における下請け受注の問題が取り上げられていた。

その後いわき市で“いわき母笑みネットワーク”“いわきの初期被曝を追及するママの会”“子どもたちの安心・安全を考えるいわきママの会”などなど、目的に応じたネットワークを次々に立ち上げたお母さんの報告。必要に背中を押されたとはいえ、見事な組織作りに感心。拍手をおくる。

最後に振津さんが、広島・長崎の被爆者健康手帳を参考に、福島でも健康手帳の制度作りをすすめたといふ提言。健康診断や医療が無料で受けられるようになれば、今後の健康維持に経費のことは心配せずにすむ。しかしながら福島の方々にもいろいろな考えがあつて、なかなか大変な道のりではあるとのこ

と。

これにて学習会は閉会。でも、これで終了ではない。ご馳走をいただきながらの交流会が待っていた。松本、いわきの方々とエールの交換。かなりアルコールがまわった状態で、ついにお開きとなりました。朝からずっとお腹いっぱい胸いっぱいの長い1日でした。

ベラルーシではそれぞれの場所でリーダーとなる方々（ほとんど女性）が、困難の中で助け合いの中心になっておられた。周囲に不安が広がらないよう理性的に行動されたようだった。福島に来る前に、福島でもそのようなリーダーがいてくださるといいのになぁと思っていた。みなさんとの出会いで、願っていたことが現実になっていることがわかり、少しはホッとした。ただ こうして発言し、活動し、仲間作りができている人たちばかりではない。ベラルーシでも感じたことだが、この方々の向こうには、情報から隔絶した状態の人、行動が思うにまかせぬまま諦めた人、困難に打ちひしがれて身動きできない人など、私たちが接点を持ちようのない人々が存在するだろう。その人たちにこそ支援が必要なのは、まだ何もできていない。このもどかしさを忘れないでいようと思う。

（何かできることがあるのか、探している田中です）

訪問3日目（11月17日）

あの日のままの富岡駅

【いわき出発】

爽やかに朝が来て、かんぼの宿の窓からは、目の下の松林に続く眩しく美しい太平洋が一面に広がりました。壊滅的な津波の被害を受けたいわき市ですが、不思議に難を逃れたこの一帯は、元々の美しい海はこんなだよと教えているようでした。

8時半、長野県松本市の原水禁の皆さんと別れ、私たちは、6号線を北上します。まずは被災直後から、高汚染地へ作業に向かう労働者の「基地」になっていた、有名な広野町のJビレッジスタジアムをめざしました。いわき市はとても広いので、20キロ圏内からの避難者も多く、南部中央は線量が低いのですが、北部に近づくに従い空間線量が上がってきます。6号線は、先の方に立ち入り禁止区域がある（通るだけの）道なのに、交通量はかなり多いです。熊本、静岡、水戸ナンバーなどがブンブンすれ違います。

【Jビレッジと天神岬】

元は楽しいサッカーの聖地Jビレッジは、今も作業員が沢山働いており、東電や協力業者の車が忙しく出入りしています。県道から一本入った民家は人が住んでないようでした。地図を見るために車を止め外へ出ました。アスファルトの道は0.4マイクロシーベルト/時、しかし、すぐ横の草地は0.8マイクロシーベルト/時。だんだん「普通」が分からなくなってきました。帰還準備区域が設定され、急いで除染やインフラ復旧を進めているようです。一昨日の菅野哲さんの言葉を思い出します。高汚染地は国が、その他は自治体が除染する決まりになり、国はすごい金かけてやっている。しかし、毎時0.2マイクロシーベルトの所を除染して毎時0.1マイクロシーベルトにしたら役に立つが、毎時10マイクロシーベルトの所を毎時5マイクロシーベルトにしても住めない。除染の仕事も、他所から来る作業員もいるがいつも被ばくを強いられている近所の住民もやることになる。金はゼネコンに行く。



津波に流された後に残る家の土台と・・・

続いてそのまま北上し、海岸が一望できる檜葉町の天神岬公園に行きました。このあたりは、昼間だけ立ち入りができる避難指示解除準備区域です。高台に上がると、今回お世話になった、社民党福島連合で頑張っている佐藤龍彦さんの故郷檜葉町が見渡せます。公園は除染が入り綺麗に掃除されていますが人の姿は疎らです。眼下に広野町の火力発電所が見えました。

【富岡駅】

6号線をさらに北上すると、右に遠く第二原発の排気塔らしきものが見え隠れしました。道が海岸にぐっと近づいた所で、県道を外れ、富岡駅に立ち寄りました。ここまでは、廃棄物を積み上げたり、無惨



壊れたままの駅舎



な更地になったり、空き家が續いたりはありませんでしたが、まがりなりにも、人の手が入っていました。しかしここは、3年8ヶ月たった今も時間が止まったような所

でした。JR常磐線の駅前には町の中心だったはずですが、津波に襲われたまま、駅のプレートは折れ曲がってぶら下がり、ひっくり返った車が思いがけない場所にいくつもあります。メインストリートの店は津波の勢いで中身を引きずり出されたまま瓦礫になって放置されています。プレートや看板には、「明るい町づくり」、「観光スポット案内」、「今月のイベント」等、そこだけ見るとうっかり3.11前の暮らしが今もあるような妙な感覚におそわれます。たくさんの人々が暮らしていて、命を落したり、逃げた後も原発のためそのまま帰れない、悪い夢だったような気持ちになりました。駅前から続く富岡の商店街を通っているとき、「ここなのよ、町の人のおススメの鰻屋さんがあったのよ」振津さんの声に我に帰りました。住んでいた人は、もっと複雑なそれぞれの思いの中に生きてるのだと、いまさらに思いあたりました。

駅の少し北には、地元では有名な桜のトンネル夜ノ森公園があります。手入れされてないのに、誰に見せるでもなく、桜の紅葉は見事でした。しかし、途中から立入禁止で、ゲートキーパーが立っています。回り道して引き返すしか



立ち入り禁止の看板と閉じられているゲート。そばにはゲートキーパーが・・・

ありません。ここから先は帰還困難地域で、住民や仕事で入る人許可が必要

な場所が広がります。まだ若いゲートキーパーさんは、一日立っていて大丈夫かなあと、思いつつ、富岡を後にしました。



駅前には慰霊碑とお供え物が・・・

【帰還準備区域】

帰り道、6号線沿いの檜葉町役場前の避難指示解除準備区域にできた仮設の食堂でお昼をたべました。仮ごしらえの店の店主は富岡町の人で元々富岡町の夜ノ森地区で食堂をしていたとのこと。帰れるのは嬉しいが、役所が帰っても水やガスや電気がいるし、人が戻るかどうか、と話しておられました。

【郡山の3a】

午後からは昨年訪問した「3a」にうかがう予定にて、取って返し、郡山へ向かいました。中通りの郡山は、20キロ圏内を含んだ浜通りの町々と違い、制限のない生活と言う事になっています。浜通りからこちらに避難している人も沢山います。しかし、実際はかなりの放射線量があり、3aのお母さん達は、子ども達の未来を考え、暮らしの不安を軽減する活動をしています。正式名称は「3a安全安心アクション in 郡山」子供達が普通に行く身近な場所の線量測定や、食料品の微量線量測定、安心な野菜の共同購入等、具体的な活動で、政府や自治体の無策に一石を投じています。

【0・85 マイクロシーベルト/時】



3a の自主測定では、郡山の駅前が 0.19～0.28 マイクロシーベルト/時、駅前通りは 0.30～0.47 マイクロシーベルト/時、開成山公園は、0.25～0.85 マイクロシーベルト/時。（ホットスポットファインダーで、地表 50cm で測定。2014 年 9 月。）かなりの線量のホットスポットが、まだ街中に散在しています。

3a 代表の野口さんの、「行政は一回した所の二回目の除染は絶対にしないと言う。」「B級グランプリのイベントの為に車道を緊急除染したのに、子供が歩く道はそのまんま」との怒りの説明に、ホントに優先順位を間違っていますよねと、相づち。子供達は運動場や公園で寝転がったり三角座りをします。すごいお金をかけて、作業員はいっぱいヒバクして高汚染地を掘り返しているけど誰も帰れない。ちょっとした指導や少しの集中的な除染で避けられるヒバクをど

うしてなんとかしないのかと、一緒に憤りました。お母さん達の声は、年中ヒバクばかり気をつけているのは辛い。心配な事を気にしないよう努力する人もストレスを抱えている。心配しすぎと言われるから互いに放射線について話さない。とのことでした。

しかし、毎週火曜日の安全野菜販売「お野菜マルシェ」に集まる人々は減ってないので、ニーズがあるということです。と、野口さん。子供の勉強会やお父さんの集まり、医療相談、法律相談。自らも被災当事者だけど、子育てしつつ、生活を支えつつ、仲間を拡げておられました。

【行健除染ネットワーク】

3a には、今回、「行健除染ネットワーク」の代表鈴木洋平さんも来られていました。除染は国の責任ですが、目の前の子どものためにやりたいと考える人々が自主的に参加する会です。京都精華大学の山田國廣先生の技術指導も受けて効果的な除染をタイムリーに行うというスタイルを確立しておられます。また、地図上に線量を記録できるホットスポットファインダーという高性能な機械で地域の環境を調べ、ネットにアップしています。

鈴木さんも郡山の普通のお父さん。3.11 の後、子供の通っている小学校の校長先生が自ら放射線量を測ったり土を剥いだりしていることに共感し行動開始したとのことです。PTA役員の多くが「政府が大丈夫と言ってるから大丈夫だろう」というのを説き伏せ、有志を募り、補助金も獲得し、多方面の連携・ネットワークを作って来られました。



【自ら考え行動する】

子ども達が被ばくしても仕方ないと済ませることはできません。お二人とも、苦労は大きいと思いますが、住民みんなが口には出さないストレスを、自ら考え行動に移すことで進んでいく、正道のすごさを感じました。

【聞くことから始まる】

被災者の実際の思いと状況を聞くことから始まる。私たちの立場と役割を改めて考える 3 日間になりました。

(ゆみ)

晴天の反核フェスティバル

昨年の雨のリベンジ。10月19日、今年はこれ以上ない快晴の反核フェスティバル日和でした。フェスティバルの元締め（笑）山科和子代表は、92歳とは思えない元気な声で挨拶されました。車椅子でテントを周ったり、一日中フェスティバルを楽しめました。反核フェスティバルの参加者は山科さんの顔を見たら皆さん元気がでると言われてました。

「チェル関」はいつものケーキとコーヒーとベラルーシングッズの店と、バレエの出し物で参加しました。

今年のバレエはダンスコアポシブルの新進気鋭、ふみ子先生のプロデュースでした。戦争の影がちらつき、物言えぬ時代が始まる。赤いスカートと麦わら帽子の女の子が楽しげに踊



っている。そこに来た兵士は自分の良心に反して女の子を打ちのめす。赤い帽子の女の子は倒れる。兵士は必死でに任務を果たそうとするが次第に苦しくな

って倒れる。・・・多数がダメというのに原発の再稼働が進む、秘密保護法が強行可決される。知らぬうちにノーが言いにくい危ない時代がすすんでいる。今日のバレエのように、何も言えない戦争の時代にしてしまう前に、何とかしないとダメですね。



エレガントな音楽と赤い帽子とスカートが耳と目に残る、新鮮な世界でした。

ゴークの伊達くんや常磐会学園大学の近江くんが「チェル関」の店の応援に来てくれ、チェルノブイリと福島展示、見学者への解説を引き受けてくれました。関西での保養の取り組みについてもアピールしてくれました。

反核と言うのも言いにくいアヤシイ時代、小規模でも、地域で集まりを維持する事は大事です。

核、戦争、ヒバク、差別、貧困、根っこは一つなのかもしれません。（ゆみ）



熱心にパネルを見る山科さん



チェルノブイリ原発事故28年の被災地訪問報告-その3

事務局／振津かつみ

今号では、ミンスクの「移住者の会」訪問時に聞いた、会の代表のジャンナさんのお話を報告します。ジャンナさんは原発からは約40km離れたゴメリ州の高汚染地ナローブリアから、事故の6年後に首都のミンスクのマリノフカ地区に移住しました。事故直後の混乱した様子、子どもさんの健康のこと、人々が汚染の実態を知って政府に抗議して移住するまでの経緯などを改めて話して下さいました。今年の訪問では、「移住者の会」の他のメンバー数人の聞き取りもしましたので、引き続き次号に掲載していきます。なお、全体の訪問日程はホームページから前号をご参照下さい。

<http://wakasa-net.sakura.ne.jp/che/96.pdf>

「移住者の会」代表のジャンナさんのお話

事故後一週間は普通の生活をしていて

1986年4月26日、事故当日の朝、前日からチェルノブイリ原発で当直をしていた原発労働者がナローブリアに帰ってきて、「原発で火事があったようだ」と話していました。でもその時は、誰もまだ深刻な事故だとは思っていなかったのです。当時はソ連時代で、「国がなんとかしてくれる」と思っていました。昼頃になると、いろんな噂が飛び交うようになりました。夕方頃になると、皆、不安な気持ちで一杯でした。やはり核の「平和利用」なんて、ありえないことだったと今は思います。

その日はとても暖かい日でした。週末だったこともあり、友人や親戚のところに遊びに行く人も多くいました。ナローブリアでは、原発から8キロのところにある村に住む両親を訪問した人もいました。せめて「子どもを外に出さないように」と言ってくればよかったのに。私の子どもは当時、長男が5歳半、次男が2歳半でした。被ばくから身を守るために外に出てはいけないというようなことは全く言われませんでした。ナローブリア出身ではない家族の中には、日曜日に100キロ離れたところに避難した人もいました。しかし月曜日になって学校が始まり、その家族の子どもたちがいないことがわかって、地域では「どうしてその子ども達がいらないんだ」ということになり、月曜日中に両親に連絡が入り、火曜日には子どもたちも連れ戻されてしまいました。



事故処理作業従事者の証明書を手に話すジャンナさん（手前）

その後、一週間はいつもどおりの生活をしていました。人々は畑で野菜を栽培したり、また子どもたちは学校に行っていました。4月30日になって、テレビのニュースで、爆発以前の原発の様子を背景にして、「原発は爆発していません。大丈夫です。」というような放送がありました。5月1日はメーデーの大きなパレードがあるので、子どもたちはメーデーの前に道路を掃除したりしていました。当時の埃には放射能がたくさん含まれていたと思いますが、そんな中で子どもたちが道路掃除をして、メーデーの準備をしたのです。5月1日には、子どもたちは手に花を持って外をパレードしました。当時、9年、10年生の子どもたちは、大体、ジャガイモを植える前の選別の手伝いや、冬の間、保存してあった種芋を外に出したりする作業を手伝いに集団農場に行っていました。

5月1日頃には、原発から10キロの地域の避

難が行われていました。住民は、「一時的避難なので3日間くらいの荷物と身分証明書を持って行くように」と言われました。多くの人々、特に高齢者は「庭に花が咲き始めた暖かな季節に、なんでここから出て行かなきゃならないんだ。何も危険は迫っていない。ドイツ軍が攻めてきた時は危険を感じたが、今はなんの危険も感じない。」と言って、逃げるのをためらいました。当時、学校では

5月初め、子どもたちの避難開始

事故が起こったことに世界中が注目し、外国からの声が大きくなるにつれて、「アメリカの声」などのラジオ番組から、「原発から出た放射能の量がすごいらしい」という情報が入ってくるようになりました。当時は、そのような外国のラジオ放送を聞くのは禁止されていたのですが、周波数を拾って放送を聴くような人々もいて、特にスウェーデンから、「放射性物質が拡散している」ということが伝えられたのです。5月3、4日になって、ナローブリアなど30キロ圏外でも、子どもたちを避難させることになりました。しかし放射線防護は全く行われず、ヨウ素剤も配布されませんでした。5月4日の朝9時に、私たちの地区の町から、村から全ての子どもたちが広場に集められ、バスに乗せて避難が始まりました。3歳までの子どもは母親と一緒に、それ以上の歳の子どもは、子どもたちだけで避難しました。9時頃に集合したのですが、どこに避難すべきかはまだはっきりせず、その日はとても暑い日だったのですが、子どもた

戦時のための軍事の授業があったので、その課目の教室には、様々な古い武器とかが展示され、そこには核戦争に備えて放射線の線量計がありました。先生が器械の電源を入れて測定してみたところ、針が振り切れてしまってその線量計では測れませんでした。先生達はびっくりしたのですが、上からは「線量計が壊れているのだからパニックを起こさないように」と言われたそうです。

ちは午後の3時まで広場で、避難先が決定するまで外で待っていました。ブラーギン、ナローブリア、ホイニキの三つの村でも、同じような状況でした。

当時は携帯電話もなかったので、子どもたちは100キロ以上離れたところに連れていかれるというだけで、どここの避難先で、具体的にどんなことをしているのかも全くわかりませんでした。親達は、一週間後になっても、子どもたちがいったいどこにいるのか全くわからなかったのです。その間、心配して子どもを探しに行くような親もいて、どこそこのサナトリウムにいたと言われたのでそこに行ってみたが子どもたちはいなかったと言って、いくつかの施設を回って二日も探しまわった親もいました。その後、3、4日して、子どもたちの居場所を知らせる電話連絡がありました。しかし子どもたちは一時避難ということでしたので、9月1日の新学期には、また汚染地に戻ってきました。

情報もなく汚染地でどうやって子どもを護ったらいいかわからなかった

私の子どもはおばあちゃんと一緒に避難して、ミンスクにいました。私は仕事があったのでナローブリアに残りました。住民はホールボディカウンターで、体内被ばく線量を測定されました。当時、病院に入院していた人は退院させられ、体内線量の高い人たちや事故後に病気と診断された人たちが入院させられました。私の息子も、ひとりミンスクの病院で入院しました。入院した人たちのほとんどが、疲れやすい、身体がだるいといった、同じよう症状を訴え、「ジストニア」（無力症）と診断されました。

当時、汚染地域からきた妊婦は、「事故後すぐに放射線防護の処置をされなかったのも、もしか

したら胎児に影響があるかもしれない。」として、医師から中絶を勧められたそうです。もちろん中絶したくないという人もいました。私の隣人がちょうど妊娠中だったのですが、「中絶するように」と医師に言われたがそれを拒否して6月に子供を産みました。その子は健康に生まれ、今では結婚して孫も生まれていて、よかったなと思います。医師たちが個人の見解でそのようなことを言うことは、まずなかったと思うので、たぶん上からの指示だったと私は思います。私は専門家ではないので、ちゃんとしたデータを持っていませんが、私自身が見たことをお話しているのです。

当時は国からの指示で全て隠されていたので、

情報は全くありませんでした。想像してみてください。汚染地域で全くどうやって子供を護ったらいいいのかわかりません。一体何をしたらいいのか、

息子さんの被ばくと入院

私の子どもたちも病院に入院させられましたが、病院には親は入れてもらえず、子供に何をされているのか、どうなっているのか、どんな食べ物を与えられているのかも全くわからなかったのです。

これは当時、長男が入院していた時の検査の記録です。(被曝量、血液検査、治療法、甲状腺ヒバク量などが記載されている。甲状腺被ばく量は「毎時 1900 マイクロレントゲン」 [=毎時 19 マイクロシーベルト] との測定結果が記載されていた。これはおそらく甲状腺のある頸部に測定器をあてて測定したもので、かなり高い。フクシマ事故後の3月に行われた甲状腺被ばくスクリーニングでは、

どんな薬を与えたらいいのか、全くわからない状況でした。

頸部表面での測定で、毎時 0.2 マイクロシーベルトが「甲状腺の等価線量 100 ミリシーベルト」とされていた。)

次男の甲状腺被ばく量測定は、毎時 1400 マイクロレントゲンでした。子どもたちは事故直後、放射性ヨウ素が飛んできた汚染地で無防備に過ごし、汚染した牛乳も知らずに飲んでいました。もし、防護する方法を教えてもらっていれば、もう少し被ばくから身を護れたかもしれません。しかし、逆に私達は「大丈夫だ。大丈夫だ。」と言われていたのです。

「チェルノブイリの障がい者」と認定された長男、国の施策

長男のパーベルは「チェルノブイリの障がい者」の「第一グループ」に認定されています。事故後、病院に入院していた時に、40度Cくらいの高熱を出しました。それでも私は病院に入れてもらえなかったのです。医師からは、その高熱のせいで、脳に何らかの影響が出て、てんかん発作を起こすようになったと言われました。事故後に起こった高熱で脳が障害を受け、てんかん発作が出るようになったということで、チェルノブイリの汚染地域に住んでいた人が受けられる法律の第18条に認定されている「障がい者」に該当するとされています。



ジャンナさんとパーベル君の「移住者証明カード」

これはパーベルの「チェルノブイリ障がい者手帳」(第18条の障害者)です。「汚染地に住んでいたことによる障がいである」と、記されています。

その他に「移住者の証明書」もあります。パーベルは、「チェルノブイリ障がい者」の証明書の他に、一般の「障がい者手帳」も持っているので、「証明書」を3つ持っているのです。移住者には全員、この「移住者の証明書」が支給されます。有効期限はありません。2010年に新しいカードに改訂されました。「障がい者の証明」があれば、無料で市内の公共交通機関を利用できます。ただ、パーベルは障害があつて、ひとりではどこへも行けませんが、ガスや電気代などの公共料金を支払う時には、アパートの面積を基準にするのですが、その面積の20㎡が、パーベルの居住空間として計算され、料金が免除されます。てんかんの薬は無料になります。他の病気の場合は10%分を払わねばなりません。それは全ての身体障がい者と同じ保障です。チェルノブイリの影響でなったと思われる病気(パーベル君の場合は「てんかん」)に対しては無料になるのです。ベラルーシでは障がい者は全ての病気で薬代の10%を支払います。ただ10%の薬代で購入できる薬のリストは限られているので、例えば、もっといい薬を買いたいと思ってもそれがリストになれば自分のお金で買わねばなりません。障がい者ではない人々は、薬屋で書いてある値段を支払います。(ベラルーシは、病院での診察や検査は無料だが、薬は全部、注射

薬も含めて、処方箋を書いてもらって病院の薬局で購入しなければならない。)

「チェルノブイリの被災者」として、私たちは年に1回の健康診断を受ける義務があります。それは地域の病院で受け、そこで何か異常がみつければもっと大きな病院で検査を受けます。健診は無料です。チェルノブイリの被災者に特別な病院があるのではなく、一般の病院で検査を受けます。但し、年に1回の健康診断は、チェルノブイリの被災者でなくても、職場や地域で受けられます。「チェルノブイリの被災者の証明」を持っていることの特典は、例えば仕事をしている人は、有給休暇が通常は3週間ですが、それに加えて2週間取る事ができます。また病院で診断書をもらえば有給で病休を取ることができます。また「被災者証明」があれば、年中、いつの時期でも休暇を取ることができます。

汚染地での生活、9月になると子どもたちが高汚染地に戻ってきた

9月1日に子どもたちが戻ってきましたが、子どもたちがいない間に、学校や幼稚園の校庭の土や屋根などを除染しました。除染された表面の土は、どこに運ばれたか私は知りません。当時はソ連崩壊後の混乱期で食料品や物資がとても困窮していた時期ですが、私たちは被災地域で地域の建物が全部汚染されていたこともあって、汚染されていない地域から運ばれてくる食料品が、住民のリストに従って配給されました。

また9月ころになると、やっと医者達が汚染地域に来るようになって、住民の健康診断を始めました。必要であればミンスクやモスクワで精密検査を受けることもありました。健康診断は子どもだけでなく、住民全員を対象に行われました。ミンスクから医師団が来て、全身の健診をしました。全身の診察、聴診、血液検査、尿検査、など、一般的な健診で、もし必要なら精密検査を受けました。

汚染地では、1年半の間、給料は2倍になりま

これは「事故処理作業従事者(リクビダートル)証明書」です。これは事故直後に汚染地域で何らかの仕事を行った人に配布されます。リクビダートルの証明は、事故直後に原発サイトでの「事故処理作業」にあたった人と同じ権利を保障するものです。10キロ圏内から人を避難させる仕事をした人も「リクビダートル」。例えば子どもたちを避難させた先生とかが該当します。私は、10キロ圏内に作業者のための食べ物を運搬したことで、リクビダートルの証明をもらいました。初めはウクライナとベラルーシでは同じ証明書だったのですが、今は別の共和国なのでそれぞれの国で給付されます。この証明の発行は1990年の古いもの。この証明書にはこのメダルがついていました。血液のしずくと、放射線のマークが記されています。これは2年前、渡された新しいもので、ベラルーシの法律に基づくものです。

した。キャリアもその間は倍に計算されました。(年金の計算をする時の年数が、倍になるそうです。)

その年の秋から、順次、子どもたちは汚染地の外にあるサナトリウムなどに「保養」に行きました。行き先はグルジア、コーカサス、クリミア、バルトなどソ連全土です。夏の「保養」は必ず年に1回ありました。そして幼稚園以下の子どもたちは、親と一緒に年に1回「保養」に行きました。

私たちは、汚染地域からできるだけ外に移住した方がいいという話をしていましたが、政府レベルでは、まだそのような話しはありませんでした。食料品などは全部放射能を検査をして、納品書に必ず検査ズミである証明の判子が押されていました。ただ、当時の基準は現在よりもかなり高いものでした。(例えば、毎日食べるジャガイモでも1993年までは基準は37000ベクレル/kgだった。)食物を運ぶときには、ちゃんと袋にいれ、車も外気が入らない車が用意されました。

事故後4年目、汚染地図が公表され被害全体の甚大さを初めて知る

1989年に汚染地図が発表され、地図によるとナローブリアはセシウム137で15~40キュリ/㎥(福島の前避難区域に相当する汚染レベル)の移住地区に指定されました。そのころになると政治

家などが汚染地にやってくるようになって、「ここは特に子どもにとって居住するのに危険な区域だから、政府に移住をするように要求した方がいい」と言われました。

1986年5月に10キロ圏内、6月に20キロ圏内から人々は移住しました。でも、その移住は、隣の少し汚染の少ない場所に移ったという程度でした。9月には、ナローブリアから6キロくらい離れたところ（30キロ圏内）まで移住範囲が広げられ、「ナローブリアも移住させるべき」という意見もあったのですが、人口が多い街だったので、「どうすべきか…」と迷っているうちに時間が経ってしまったのです。

1989年頃になると、ウクライナでは、ナローブリアと同じレベルの汚染地区では移住が始まっていたのに、ベラルーシの第一書記（当時の政権政党である共産党のベラルーシでの最高責任者）は、「ベラルーシは大丈夫だ。自分たちでなんとかする。」と言っていました。そして全ての援助がウクライナに行ったのです。1989年になって汚染地図

抗議の末、6年目にやっとミンスクに移住

そのような抗議行動の後、政府は障害や病気の子どもを持つ家庭から順番に移住を始めました。私たちは5年半、高汚染地に住んでいたのも、持病を持っている子どもも多かったと思います。住民はブレスト州、ビテブスク州、などベラルーシ全土に移住しました。私は、パーベルが障がい者だったので、一番先に移住の指示を受け取りました。ここのアパートの棟はナローブリアから初めて移住した人の棟です。1992年7月28日にアパートの部屋の支給を受け、実際には11月1日に引っ越しました。ナローブリアではもっといい家に住んでいたのも、あまり気に入らなかったのですが。それから、どんどん新しい棟が建って、いまではゴメリ州のホイキニ、ブラーギン、だけで

移住後の生活、突然の夫の死

問題はいろいろとありました。特に地方の農業地区で生活をしていた人々が、このような大きな街に移住してきて、とまどいもありました。ただ、病気の子どもたちが多かったのも、首都で大きな病院に行きやすくなったのは幸いでした。当時、汚染地では目に見えない放射能汚染の中で生活し、特に家族に子どもがいて、とても辛かったです。

フクシマ事故被災地の人々の悲しみを思い、子どもたちのためにできることを

フクシマの事故が起こった時には、「移住者の会」のメンバーはとても心を痛めて、自分たちと同じ

が作成され、それを人々が見て初めて人々は被害が甚大であることがわかり不安になってきました。

（地図は1990年に新聞記事に載った。）当時、ナローブリアで大きな集会が開かれました。これはソ連史上、初めての市民活動だったと思います。

「ベラルーシ人民戦線」という野党が組織しました。ミンスクへ抗議活動に行くための費用も当時の銀行が支払いました。そして国会前に人々が集まって抗議しました。当時の共産党は、「ベラルーシは大丈夫、自分たちでなんとかする」と言っていたのですが、原発のあるウクライナよりもベラルーシの方が、風向きのために被害が大きいことが、新聞に掲載された汚染地図を見て、人々もわかったのです。そういうことでベラルーシの人々は立ち上がりました。

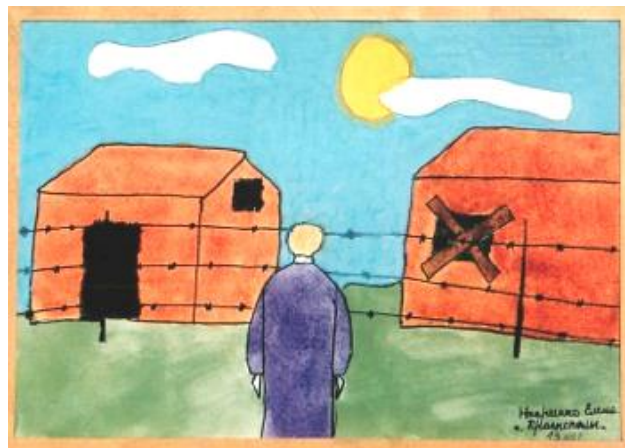
なくモギレフ州からの移住者も、このマリノフカ地区に住んでいます。最終的に1993年にマリノフカの街が出来上がり、そして学校、幼稚園が建てられ、1万人の移住者（うち4500人が子ども）が住むようになりました。マリノフカ以外にも移住者が住んでいる地区がミンスクにはいくつかあります。引っ越しの荷物を運ぶための車が二往復する費用を国が負担しました。こちらに引っ越してから4ヶ月くらいは、移住先に慣れるのに時間がかかるだろうということで4ヶ月分の給料が先に支払われ、その間にこちらで仕事をみつけることになったのです。このようにして、少しずつここでの生活が始まりました。

マリノフカに引っ越して一年半後に夫が心臓発作で亡くなりました。私はもう20年以上ミンスクに住んでいますが、多くの移住者の男性が亡くなっています。男性の方が、自分の中に辛さを溜め込んでいるからかもしれませんね。今、マリノフカには夫を亡くした女性が結構います。

ような経験をする人たちが増えるだろうと、とても悲しみました。特に日本は、人口密度の高い国なので、多くの人々が被害を受けるのではないだろうか。日本のような高い技術を持った国の原発が事故をおこすとは全く想像が付きませんでした。が、そういうことが起こってしまった…。

チェルノブイリの事故が起こった時には、私たちベラルーシの子どもたちを、多くの外国の方々が、受け入れて下さったことをとても感謝しています。私たちは、「救援関西」を通して、「フクシマの子どもたちの受け入れをしたい」と伝えました。飛行機の代金を出す事はできませんが、メンバーの全ての家族が、子どもたちの受け入れに賛成してくれました。今でも多くの家庭で子どもたちを受け入れる準備ができています。私たちベラルーシは、思いやりのある民族ですので、いつでも隣人とパンを分け合うことができます。パンだ

けでなくサラ（豚肉の塩漬け）も、ウォッカも（笑い）。なので、もし希望する家庭があれば、喜んで受け入れたいと思います。できるだけフクシマ事故の被ばく被害が早く収まりますように、人々ができるだけ心穏やかに生活できますように。



ベラルーシの子どもの描いた絵

地球上でこのような悲劇がもう起こらないように願って体験語る

放射能は国境も民族も関係なく広がるものです。一方では「利益」をもたらすかもしれませんが、他方ではこのような被害をもたらすものです。チェルノブイリの悲劇について話しをするときには、私は科学者ではありませんので科学的なことは語れませんが、自分たちの経験したことを話します。地球上のどこでも、このような悲劇がもう起こらないように願っています。

最後に、ベラルーシの子どもの描いた絵 と思います。これは 100 年以上も続いた伝統ある有名なお菓子工場でした。これはドイツ軍との闘いで亡くなった人たちの記念碑。幼稚園。これは店です。とても美しい街でした。これは立ち入り禁止地域です。これは私の生まれた家ですが、もう今は誰もいません。これはペチカ。これは母の写真…。

国際交流大バザールに参加しました。



大阪府立美原高校で、11月22日、第17回国際大バザールがあり出店しました。今年は晴天に恵まれ、全校生徒を始め父母や近隣の人たちの参加で大賑わい！交流広場では、カポエラ、沖縄エイサー、中国拳法、羽曳野太鼓など力いっぱい披露していました。模擬店や物販店は12か国。私たちはベラルーシのマトリョーシカなどの民芸品他古着などを販売し、約11000円の売り上げがありました。今年もタイの汁



ビーフンやケニアのチャイなど美味しくいただきました。鎌橋さん、木下さん、お疲れ様でした

（久保きよ子）

ゴーワーク写真展と映画「逃げ遅れる人々」

10月23日、京都のゴーワークキャンプ写真展に参加しました。

映画と宇野田さんのお話もあり、被災地のあの日を改めてひしひしと感じました。

芝さん石橋さん、いい映画ありがとう(v^_^)ございました。

映画は、障害を持った方と言う切り口でしたが、だからこそというか、すべての人々に一般化しても、被災地の様子、その場におかれた方々の恐怖やギリギリの決断がよくわかりました。

避難は簡単でないこと、やっとバランスとして暮らしている人々にとって簡単に命取りになることがリアルにイメージできました。

介護や看護のスタッフの立場からは目の前の方々を抱えて、逃げる事も護る事も出来ない恐ろしさに震えました。

今の世の中の本質が現れる！最悪の選択を避けるために、国レベルで考えるべきですね。

写真展は、ゴーワークの一年目二年目三年目が、並んで展示されていました。変わらない被災地の事を思う一方で、ゴーワークキャンプのみなさんの関心の広がりや深さを感じました。

写真の中の参加者のこども達が、水飛沫をあげて、笑っています。一年ずつ大きくなっているのに気付き、みんな楽しいエピソードを思いだし、談笑していました。(ゆみ)

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2014.10.18~2014.11.30

鎌橋照子 木下佳子 久保きよ子 ダンスコアポシビル 安田寿夫 長沢智行 即得寺 藤田達 丹居敬子 中川慶子 奥平純子 井上澄江 稲岡美奈子 小村幸子 原水禁松本地区協議会 中井かをり 曾我日出夫 振津かつみ

(順不同・敬称略)

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先：〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

郵便振替：00910-2-32752

口座名：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西